

【翻訳】

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第十一章～第十二章*

堀 智 弘

第十一章 「ひとつの変化が我が夢の精神に訪れた」¹

いかにして作者は文字の読み方を学んだか、女主人、奴隷所有者としての彼女の義務、彼女の本来の高貴な性格にそれが及ぼす嘆かわしい影響、彼女の心の葛藤、読み方の学習に対する彼女の最終的な反対、手遅れ、彼女から「インチ」をもらい、わたしは「エル」持つていくことを決意した、いかにして自分の教育を継続したか、個人教師たち、どうやって彼らに報いたか、どれだけ進歩したか、奴隷制、それについて聞いたこと、十三歳、『アメリカの雄弁家』、ある重要な場面、問答、チャタムとシェリダンとピットとフォックスの演説、増えていく知識、開眼する、自由、どれだけそれを切望したか、悲しみ、哀れな女主人の不満、奴

隷制への嫌悪、一本の毒の木がわたしたち双方に影を投げかける

わたしは、ボルチモアでは、主人ヒューの家庭に七年同居した。そのあいだ——年鑑の編者が天気について言うように——状況は不安定であった。わたしの来歴の最も興味深い特徴は、いくらか顕著に不利な状況にありながら、読み書きを学んだことであった。この知識を獲得するにあたって、わたしの性格にまったくそぐわない、実に屈辱的な策略に訴えざるをえなかった。我が女主人は、すでに読者も見つたように、わたしの教育に乗りだしていたが、夫の強力な助言によって、その親切な計画に突如歯止めがかかった。この善良な婦人は、この助言に忠実に従って、自身でわたしを教育するのをやめたばかりでなく、わたしがどうかして読み方を学ぼうとしていると、断固とした態度をとった。しかし、彼女に対して正当を期すために言うておくと、彼女は当初からこ

(29)

* 本稿は JSPS 科研費 JP21K00384 による研究成果の一部である。

¹ バイロン卿の詩「夢」（一八一六年）、第三連一行目からの引用。

の方針を厳格に墨守していたわけではない。彼女はそのような方針は不必要だと考えていたか、もしくは、わたしを精神的な暗闇に閉じ込めておくのに不可欠な堕落を欠いていた。彼女がわたしの人間としての本性と性質を忘れ、精神的あるいは知的な本性の欠如した物としてわたしを扱うようになるためには、奴隷所有者の特権行使の訓練をいくらか積んで、いくらか無情になることが少なくとも必要であった。オールド婦人——我が女主人——は、すでに述べたように、非常に親切で優しい心の女性だったのであり、わたしが彼女と同居した当初は、その心の人間性とその精神の単純さをもって、ひとりの人間が別の人間を扱う際にはこうすべきだと彼女が思っているやり方で、わたしを扱ってくれた。

奴隷所有者の義務を担うには多少の経験が必要であることはたやすく了解できる。自然の計らいにより、男女が奴隷や奴隷所有者になるべく準備させられることはほぼないのだ。長期にわたって継続された厳格な訓練以外には、なにも奴隷や奴隷所有者の特質を完成させることはできない。自由への愛を簡単に忘れることはできず、仲間のうちにあるこの自然な愛を尊重しなくなることも同様に困難である。オールド婦人は、奴隷を所有する女主人としての稼業に参入するには顕著に不向きだったのであり、本性に基づけば、だれもがそのような仕事には向いてはいないが、わたしの知るどんな婦人と比べても、彼女ほど本性の働きによって不向きな人はいなかった。隣に立ち、ひびに寄りかかってくることさえある縮れ毛の少年、トミーちゃんから愛され、そしてトミーちゃんを愛している縮れ毛の少年が、自分に対しては動産としての関係しか保持していないと彼女に思わせ、感じさせるのはたや

すいことではなかった。わたしはそれ以上、上の存在だったのであり、彼女はわたしのことをそれ以上だと感じていた。わたしは話すことも歌うこともでき、笑うことも泣くこともでき、思考することも記憶することもでき、愛することも憎むこともできた。わたしは人間だったのであり、彼女、親愛なるご婦人はそのように知り、感じていた。ならば彼女は、自身の魂の高貴な力すべてとせいっぱい戦うことなしに、わたしを野獣として扱うことはできたのだろうか。そうした戦いが到来し、夫の意思と力が勝利を収めた。彼女の高貴な魂は打ち倒されたが、それを打ち倒した人自身も戦いの影響を逃れなかった。この人物も、もう一方の当事者たちと同じくらい、この陥落によって、家庭内の平和にありながら傷ついていた。

わたしが彼らの家庭にやってきたとき、それは幸福で満ち足りた住み家であった。家の女主人は愛情と優しさの模範であった。その熱烈な敬虔さと油断ない廉直さのために、彼女を見ると「あの女性、キリスト教徒だ」と考え感じずにはいられなかった。彼女が涙を流さない悲しみや苦しみはなかったし、彼女が微笑まない無邪気な喜びはなかった。お腹をすかせている人にはパンを、裸の人には服を、近くにやってきた嘆く人全員に慰めを与えていた。すぐに奴隷制は、彼女からこうした素晴らしい性質を、その家庭から初期の幸福を奪い去る力を証明した。良心はあまりの暴力には耐えることができない。いったん完全に破壊されてしまつたら、だれがこの損傷を繕うことができるだろうか？良心は日曜日には奴隷に対して破壊され、月曜日には主人に対して破壊されるかもしれない。良心はそのような衝撃には耐えられないのだ。

それは完全な状態で立っていないのではなく、そうでなければ倒れてしまう。もしわたしの状況が悪化したとすれば、この家族の状況はそれよりましではなかった。悪い方向への最初の一步は、わたしの若い精神を啓発するはずの善意に歯止めをかけることによって、本性と良心へ暴力をふるったことであつた。彼女はわたしの教育をやめたことで、自分自身に対して、自分自身を正当化しはじめなくてはならなかつた。そして、このような議論で片側の肩を持つことにいったん同意してしまつたと、その立ち位置から身動きができなくなつてしまつた。我が女主人がいまやどこに陥つたかを了解するためには、道徳哲学の知識はほとんど必要でない。ついに彼女は、わたしが読み方を学ぶことに対して、夫以上に激しく反対するようになった。彼女は夫が命じたとおり、することだけでは飽き足らず、彼の教えの上をいこうと決意したようであつた。わたしがどこかの隅や角に腰をおろして静かに本や新聞を読んでいるのを見かけたときほど、我が哀れな女主人が――転落の途を辿るようになったあと――怒ることはないように思へた。彼女は極度に慌てた様子でわたしの方に突進してきて、そうした新聞や本をわたしの手からひたつたのであるが、その様子ときたら、謀略へのかかわりを危険な密偵によって暴かれてしまつた際に裏切り者を感じるであろう怒りと狼狽を思わせた。

オールド婦人は頭のよい女性であり、夫の助言と彼女の経験は、教育と奴隷制が両立しないことを彼女が完全に納得するほどすぐに証明した。この確信が完全に確立されると、わたしのすべての動きは非常に注意深く見張られた。わたしがある程度の間、家族とは別の部屋にとどまっていると、本を携えているので

はないかときまつて疑われ、すぐに説明するように求められた。しかし、これはすべて完全に手遅れであつた。最初の決して引き返すことのできない一步は、踏み出されてしまつていた。彼女は、単純で親切であつた時期にわたしにアルファベットを教えたことで、「一、イン、チ」を与えてしまつたのであり、今となつては、並大抵の用心ではわたしが「一、エル」持つていくのを妨げることはできなかつた。

どんな犠牲を払つても文字の読み方を学んでやるうという決意をもって、わたしはこの望んだ目的を達成するために、多くの手段に訴えかけた。わたしが主に採用し、非常にうまくいったやり口は、路上で会う若い白人の遊び仲間たちを先生として使うということであつた。ほぼいつでもウェブスターの綴り字学習本をポケットに忍ばせておいて、お遣いに出されたときや、遊び時間が与えられたときに、若い友人たちと道の脇に寄つて、綴り字のレッスンを受けるのであつた。わたしがたいてい学費として払つていたのは、こちらもポケットに忍ばせていたパンである。乾パンひとつあれば、お腹をすかせた小さな同志たちはだれでも、わたしにとってはパンよりも価値のあるレッスンを施してくれるのであつた。しかし、全員がこの報酬を求めたわけではなく、わたしに教える機会があればいつでも喜んで教えてくれる友人もいた。わたしが感じている感謝と愛情のちよつとした証しとして、こうした少年たちの二、三人の名前を述べておきたいという気持ちに強く駆られるが、用心のためにそれはできない。これはわたしに害を及ぶだろうからという理由によるのではなく、彼らに迷惑をかけるかもしれないためである。というのも、奴隷州におい

て、直接的にも間接的にも奴隷の自由を促進するようなことは、ほぼ許されることのない罪だからである。わたしの親切な小さな遊び仲間たちについては、彼らがフィルポット通りのダーギンとベイリーの造船所のすぐ近くに住んでいたということ述べれば十分である。

奴隷制は、メリーランドの大人たちの間ではデリケートな話題であり、非常に慎重に話がなされていたが、わたしはそれについて、白人の少年たちと頻繁に——そしてとても自由に——話していた。ときどき、縁石や地下貯蔵庫の入り口に腰掛けて、「君らが大人になったら自由になると同じように、僕も自由になれたらなあ」と彼らに言ったものである。「君らは二十一歳になったら自由になって、どこでも好きなところに行けるけど、僕は一生奴隷だ。僕には、君らと同じくらい自由になる権利はないのなあ」。こういう発言はいつでも彼らを動揺させることにわたしは気づいた。そして少年たちから、しなびたりねじ曲げられたりしていない本性から発する、奴隷制に対するあの新鮮で痛烈な非難をときに引き出せると、少なからず満足を得られた。すべての良心のうちで、わたしが関わりたいのは、人生の心労によって押しつぶされていない良心である。わたしが奴隷制の下にあったとき、奴隷制を擁護する少年にはひとりとして会ったことを思い出す。

2 フィルポット通りはフェルズ・ポイントのすぐ海沿いを東西に走っていた通り。現在、周辺はフレデリック・ダグラス・アイザック・マイヤーズ海浜公園となっている。オールド夫妻は、ヒュー・オールドがダーギンとベイリーの造船所で働き始めて間もない一八二七年か一八二八年に、フィルポット通りに引っ越していた。ジョン・ダーギンとトマス・ベイリーは、一八二〇年代末〜三〇年代にかけて、フィルポット通りで造船所を経営していた。

せないが、わたしを自由にしてくれるかもしれない何か、この先起こるだろうという希望を指し示すことで、わたしを慰めてくれる少年は頻繁にいた。彼らは何度も何度も、「君には、僕らと同じくらい、自由になる権利があると信じてるよ」、「神様がだれかを奴隷にするなんて信じてないね」と言っていた。遊び仲間とのこうしたちよつとした会話には、自由へのわたしの願望を弱めたり、奴隷としての境遇にわたしを満足させるような性質が皆無であったことを、読者は容易に了解するであろう。

わたしが十三歳くらいで、すでに文字の読み方を習得していたころ、特に〈自由州〉に関する知識が増加するたびに、「自分は、一生奴隷だ」という考えは、ほとんど耐えがたい重みとますますなっていた。わたしの隷属には終わりがないように思えた。それは恐ろしい現実だったのであり、この考えがわたしの若い精神をどれだけ苦しめたのかは言い表すことができないだろう。幸運なことに、あるいは不幸なことに、我が生涯のこの時期に、その当時とても人気があった教科書、すなわち『アメリカの雄弁家』を買うだけのお金を稼いでもっていた。わたしは、ボルチモアのフェルズ・ポイントのテムズ通りのナイト氏から、五十五セントを払ってこの書籍を購入し、自分の蔵書に加えた⁴。この本を

3 『アメリカの雄弁家』(The Columbian Orator) は、ボストンの教師で出版業を営んでいたケイレブ・ビンガム(一七五七—一八一七)が編纂し、一七九七年に出版した雄弁術の指南書。歴史上の著名な雄弁家の演説からの抜粋を数多く収録し、当時のアメリカで最も人気のある教科書のひとつであった。

4 ナサニエル・ナイト(一七七八—一八五四)はボルチモアの書店主で、この地域の名士として知られていた。テムズ通りは、オールド夫妻が住んでいたフィルポット通りの東端から埠頭沿いに延びる通りである。

購入しようという気になったのは、少年たちが発表会のために、この本からどれかの小文を学ぶつもりだと言っているのを聞いたからである。この本はたしかに貴重な宝物であって、しばらくの間は、機会さえあれば、この本を熟読して過ごしていた。ほかの多くの興味深い文章のなかであって、何度熟読しても衰えることのない満足をもたらしてくれたのは、ある主人とその奴隷とのあいだの短い問答である。奴隷は二度目の逃亡の試みで捕らえられたとされており、主人は問答を糾弾の言葉で始めると、奴隷を恩知らずだと咎め、奴隷に対して、自己弁護のために言おうべきことはあるかとせまる。このように糾弾され、このように返答することを命じられ、奴隷は、自分は完全に所有者の手中にあるのだから、自分がなにを言おうとほとんど役に立たないとわかっていると答え、高貴な決意をもって、「自分の運命に身を委ねる」と平然と述べる。奴隷の返答に気持ち動かされた主人は、もつと話すように要求し、奴隷に対して自分がやってきた数多くの親切な行為を並べたて、お前の思うところを話すことを許してやると奴隷に言う。このように議論するよう促されて、かつての奴隷は熱意のこもった自己弁護を行い、それに続いて、奴隷制を擁護する議論も反対する議論もすべてが場に持ち出される。議論のあらゆる局面で主人は打ち負かされ、自分がこのように打ち負かされたことを知って、彼は寛容かつ従順に奴隷を解放し、奴隷の幸福を祈る。このように始まり、このように終わる問答が——自分が奴隷であるという事実が常に悲嘆の重荷となっていたときに読んで——わたしの心をひどく揺り動かしたことはほとんど言うまでもない。そして、この事例において奴隷が主人に向けて見事に

狙い定めて発した返答に相当するようなことを、わたし自身が述べる日が来るかもしれないと感じずにはいられなかった。

しかし、わたしがこの『アメリカの雄弁家』に熱狂したのは、これだけによるのではない。そこで出会ったのは、カトリック教徒解放についてのシェリダンの力強い演説や、アメリカでの戦争についてのチャタム卿の演説、偉大なウィリアム・ピットやフォックスの演説である⁵。わたしにとってこれらはすべて、まさにうつつうけの文章であり、知性の増大にあわせて増すばかりの関心をもって、それらを何度も読み返した。というのも、たくさん読めば読むほど、理解が深まっていったからである。これらの演説を読むことで、わたしの限定された言葉の蓄えはおおいに増強され、それまでは頻繁にわたしの魂にひらめいては言葉にで

5 アイルランド出身の劇作家で、政治家としても活躍したりチャード・プリンズリー・シェリダン（一七五一〜一八一六）は、カトリック教徒解放運動の支持者であったが、『アメリカの雄弁家』に抜粋されている唯一の演説はそれに関するものではない。ダグラスがここで言及しているのはおそらく、統一アイルランド人連盟の運動家で、アイルランド議会議員を務めたアーサー・オコナー（一七六三〜一八五二）による、カトリック解放のための法案支持を呼びかける一七九五年の演説からの抜粋だと考えられる。この抜粋は、ダグラスが直前に取り上げている主人と奴隷の問答の直後に収録されており、そこでオコナーは、カトリック解放をアメリカの独立運動になぞらえている。ウィリアム・ピット（一七〇八〜一七七八）は初代チャタム伯爵で、同名の息子と区別して大ピットという名前でも知られる大政治家。『アメリカの雄弁家』にはピットの演説からの抜粋が七篇収録されているが、そのうち五篇がアメリカの独立に関するものである。ピットはアメリカの独立を支持し、アメリカ植民地で尊崇されていた。大ピットと同じくホイッグ党のチャールズ・ジェイムズ・フォックス（一七四九〜一八〇六）は、その父ヘンリーとともにピット親子の最大の政治的ライバルであったが、トマス・ジェファソンやベンジャミン・フランクリンとも交友があり、アメリカの独立を支持していた。

きないまま消え去っていた、多くの興味深い考えを言い表すことができるようになった。奴隷所有者の心にさえ響き、彼の現世的な関心を永遠の正義の要求のために放棄するように強い真実の偉大なる力と内省をうながす率直さは、先ほど言及したばかりの問答によってうまく例証されていた。そしてシェリダンの演説からは、抑圧に対する大胆で強力な糾弾と、人間の権利の最も見事な擁護を読みとった。これは確かに高貴な獲得物であった。もしわたしが、神はなんらかのやり方で奴隷制を命じており、彼自身の栄光のためにわたしの隷属を意思しているのだと考えて動揺することがあったとしても、もはや心が揺らぐことはなかった。いまやわたしは、すべての奴隷制と抑圧の秘密を見抜き、その根底に本当にあるのは人間の傲慢と権力と強欲だということを突き止めていた。問答と演説はどれも自由の原則を想起させ、奴隷制の本質と性質について溢れんばかりの光を投げかけていた。この種の本を手にし、自分自身の人間本性と自分が経験した事実を助けることで、白人であろうと黒人であろうと——というのも、盲目はこの点では前者に限られていないので——奴隷制の宗教的な擁護者たちとの戦いで対等に渡り合えるようになった。わたしは南部で、自分たちが奴隷制に従い、従順で謙遜に鎖を身につけるように、神によって求められているという誤った考えをもっている宗教的な黒人に数多く出会ってきた。このような戯言を受け入れることはできなかったし、そのようなことを信じるほど頭の弱い黒人がいるとほとんど耐えられなかった。だが、知識の増大はよい結果だけでなく、苦々しい結果も伴っていた。たくさん読めば読むほど、奴隷制、そしてわたしを隷属させる者たちを憎悪

し嫌悪する気持ちが膨れ上がっていったのだ。「奴隷所有者たちは、僕と同胞の人たちをさらって奴隷制に陥れるために自国を離れてアフリカにやってきて、うまいことやった盗賊団にすぎない」とわたしは考えた。わたしは彼らのことを最もあさましく最も邪悪な人間として忌み嫌うようになった。見よ！読めば読むほど、主人ヒューによって鮮やかに予言されていたまさにあの不満が押し寄せてきたのであった。わたしはもはや、ボルチモアに最初に降り立ったときのような、陽気さと活発さに満ちた快活で上機嫌な少年ではなかった。知識が到来すると、我が住み処であった精神的な牢獄に光が差し込んできた。そして見よ！そこには、我が背中に当てるための血まみれの鞭が、ここには鉄の鎖があるぞ。そして我が善良で親切な主人、彼こそが我が境遇を作り出している張本人なのだ。この啓示はわたしの心から離れず、わたしを苦しめ暗鬱で惨めにした。この知識の痛みと苦しみに身悶えていると、仲間の奴隷たちの愚かな満足がほとんど羨ましくなった。この知識はわたしの目を恐るべき奈落に向けて開かせ、わたしに跳びかからんばかりの恐ろしい竜の牙を露わにするが、逃亡するための道は開示してくれないのであった。わたしはしばしば野獣、あるいは鳥になれればいいのに——奴隷以外ならなんにでもなればと思っていた。わたしの能力では表現できないほど、惨めで憂鬱であった。あまりに物思いにふけていたので、幸福になれるはずもなかった。わたしを悩ませ苦しませていたのは、この終わることのない思考であったが、わたしの考えからこの問題を取り除くことはできなかった。自然すべてがそれを思い起こさせた。わたしの精神は、知識の銀のラッパによっていったん起

こされると、永遠の不眠に陥ってしまった。自由！万人が有するこの至上の生得権は、わたしにとつて、すべての物をこの偉大な権利の主張者へと変えてしまった。それはすべての音のなかに聞こえ、すべての物のなかに見出された。それはずっとそこにあつて、わたしに自らの惨めな境遇を実感させて苦しめた。自然の微笑みが美しく魅力的であるほど、わたしの境遇は恐ろしく救いのないものとなつた。なにかを見れば必ずそれを見て、なにかを聞けば必ずそれを聞いた。それがすべての星から視線を送り、すべての静けさのなかで微笑み、すべての風に息づき、すべての嵐のなかに蠢いていたと述べるとき、誇張しているわけではない。

わたしの精神状態が、かつてわたしに対して親切であつた女主人が示すようになった扱いの変化と関係があつたことは確かである。わたしの暗くうつむき加減で不満げな様子が、彼女の気分をひどく害するものだったことは容易に信じていることができる。哀れな婦人よ！彼女はわたしの苦悩を知らず、わたしも彼女にあえて言おうとはしなかつた。彼女にわたしの本当の精神状態を率直に伝え、その理由を言うことができたなら、双方にとつてよかつたかもしれない。彼女から冷たい扱いを受けることは、偽りの預言者が彼のロバに振るう殴打と同じように思われ、彼女は道の途中に天使が立っていることがわかつておらず、そして——主人と奴隷の関係はこのとおりなので——わたしは彼女にそれを告げることができなかつた。自然はわたしたちを友人にしたが、奴隷制が

6 民数記 22:30 に基づく。預言者バラムはロバに乗って移動中に、道をふさぐ人物が神の使いであることに気づかず、道からそれたロバを何度も殴りつけた。

敵、同士にしたのだ。わたしの関心は彼女の関心とは逆の方向を向いており、わたしたちはどちらも自分なりの考えと計画をもつていた。彼女はわたしを無知のままにさせることを目指し、わたしは知識を増加させるだけだとしても、知ることを決意していた。わたしの感情は、受けてきた扱いになんらかの顕著な残虐さがあつた結果でなく、自分が奴隷であるというそもその思考から生じていた。わたしが憎んでいたのは奴隷制であり、そこで起こる単なる出来事ではなかつた。わたしは騙されていたのだ。

わたしを無知にとどめておく試みを見透かしたのだ。わたしを奴隷にし、他の者たちを奴隷にしながら、たんに神の権威のもとに行動しているのだと、奴隷所有者たちが嬉々としてわたしに信じさせようとしていることがわかつたので、彼らを盗賊でペテン師だとみなすようになった。十分な食事と衣服をくれても、わたしから自由を奪っていることの償いにはなりようもなかつた。女主人が微笑んでも、わたしの若い胸に宿る深い悲しみを取り除くことはできなかつた。実のところ、彼女の微笑みはわたしの悲しみをしだいに深めるだけであつた。彼女は変わってしまった。そして、わたしも変わったことを読者は了解するであろう。わたしたちはどちらも、同一の重くのしかかる悪の犠牲者であつた——彼女は主人として、わたしは奴隷として。彼女のことを厳しく責めることはやめておこう。彼女がわたしを責めることもできない。わたしが真実しか述べておらず、奴隷制に反対するにあつては、逆の境遇であれば、彼女自身が行動したのであると同じようにわたしは行動したことを彼女もわかっているのだから。

第十二章 宗教的な本性の目覚め

廃止論者が話題となるこの言葉が何を意味するか知りたくなる。辞書にあたってみる。刺激的な情報どこでいかに得たか。謎が解ける。ナサニエル・ターナーの反乱。コレラ。宗教。ハンソンという名のメソジスト派牧師によつてはじめて目覚めさせられる。我が親愛で善良な老黒人の友ローソン。彼の性格と仕事。彼のわたしへの影響。お互いへの愛着。彼の教えから得た慰め。新たな希望と願望。地上の闇に差す天上の光。波止場の二人のアイランド人。彼らの会話。文字の書き方をいかに学んだか。目標としていたこと。

前の章で述べたひどい精神状態のなかで、隷属の生涯に運命づけられているために自分が存在していること自体を嘆き、あまりに惨めで追い詰められているので、時には自分自身の命を抹消してしまいたいという気分になることさえあったが、わたしは、奴隷制という問題に関連することであれば、明るみに出ていることはすべて、どんなことでも知りたいと感覚を失らせて欲していた。奴隷や奴隷制という単語が白人の口から漏れたときにはいつでも、全身を耳と目にして身構えていたが、わたしたちの家での高尚な社交的議論では、こうした単語が主となることが珍しくなかった。ちよつとした合間ごとに、主人ヒューやその仲間のだれかが「ハイシロンジャ」について熱気と興奮をもって話すのを盗み聞きすることができた。これがだれ、あるいはなんであるのか、わたしは完全に知らなかった。だがそれがなんであれ、あら

ゆる等級の奴隷所有者たちによつて心から憎まれていて、ひどく罵られていることがわかった。また、廃止論者が言及されるときには、奴隷制がなんらかのかたちで考慮の対象となっていることも実にまもなく発見した。このため、この言葉はわたしにとつて非常に興味深いものとなった。また、奴隷が自分の主人を殺したり——それはときに起こった——監督を殴り倒したり、主人の住居に火を放つたり、日常的にはみられない暴力や犯罪を犯したときには、そのような犯罪は廃止運動の当然の帰結だと言われるのが常であった。そのような非難が頻繁に繰り返し口にされるのを耳にして、わたしは当然のことながら、廃止とは——それが他になんであるとしても——奴隷にとつて不都合なものではありえず、また奴隷所有者にとつて都合のよいものでもありえないという印象を得た。そのためわたしは、廃止論者とはだれでなにもなのか、そしてなぜ彼らはこれほど奴隷所有者たちの神経を逆撫でするのか、できれば知ろうと乗り出した。辞書はほとんどなんの役にも立たなかった。辞書によれば、廃止とは「廃止する行為」だと教えてくれるのだが、わたしがまさに最も情報を必要としている点については——つまり、廃止されるべきものについては——わからないままであった。『ボルチモア・アメリカン』という街の新聞が、辞書からは得られなかったその刺激的な情報を提供してくれた⁷。その紙面から、ワシントンのコロンビア特別区での奴隷制の廃止と、連邦内の州間の奴隷取引の廃止を求める

7 ボルチモアの『アメリカン・アンド・コマーションナル・アドバタイザー』はメリーランドで最古の新聞（一七九九年創刊）で、ホイッグ党との結びつきが強く、南北戦争期には北部連邦と共和党を支持した。

多数の嘆願書と請願書が、ある日に議会へ提出されたことを知った。これだけで十分であった。我らの白人たちがこの話題に触れる際に示す、やられてなるものかという敵意、異様なまでの警戒心、不自然な沈黙、ぎこちない歯切れの悪さは、いまや完全に説明された。これ以降、「廃止」や「廃止運動」という言葉を耳にするときはいつでも、それを自分の個人的関心に関わるものと感じるようになり、できるときには近寄って行って、あまりそわそわと詮索しているふうにみえないようにして話を聞いた。これらの言葉には〈希望〉があったのだ。またときには、奴隷制への厳しい非難が我々の新聞に掲載されることがあり——北部の奴隷制廃止新聞から転載されていた——そのような非難の不当さについて述べられているのを見ることができた。わたしはこうした記事を熱心に読んだ。奴隷所有者たちの悪業は世間の目から隠されておらず、奴隷制の非道さと残忍さを憎んでいるのはわたしだけではないと考えて、深く満足した。さらにもっと深い一連の考えが掻き立てられた。廃止論者たちに関する話し方には、怒りとともに、恐怖があることに気づいたのだ。したがって、この国で廃止論者たちにはなんらかの力があるのだと考えざるをえず、彼らはその意図しているところのことをもしかするとうまくやり遂げるかもしれないと感じた。この話題について話しても大丈夫だと思われる奴隷と会ったときには、この謎に関して、それまでにわかったかぎりのことを伝えるようにした。こうして、この偉大な運動の光が、わたしの心に徐々に差し込んでいった。そして、当時のわたしはこの運動の哲学を知らなかったが、当初からそれを信じていたということを言っておかなくてはならない——それに、

それを信じていたひとつの理由として、それが奴隷所有者の良心を動揺させていたということがあったと言わなくてはならない。ナサニエル・ターナーの反乱は鎮圧されたが、警戒と恐怖は収まっていなかった。コレラが到来しようとしており、神が白人たちに対して、彼らの奴隷所有の悪のゆえに怒っていて、そのため天罰がこの地に及んでいるのだという考えが広まっていた。奴隷制廃止運動に多くの期待をかけないでいるのは無理であった。それは神によって支持されていて、〈死神〉をも味方につけていることがわかったのだから！

反奴隷制運動、およびそれがもたらすかもしれない結果について考えをめぐらすようになる前に、わたしの精神は真剣に宗教という主題に目覚めていた。十三歳を超えていないときに、神が父かつ守護者として必要だと感じたのだ。わたしの宗教的本性は、ハンソンという名の白人のメソジスト派牧師の教えによって目覚めた¹⁰。すべての人は、大きかろうと小さかろうと、奴隷だろろうと自由だろろうと、神の目からすると罪人であり、神の統治に対する生まれつきの反逆者なので、自分の罪を悔い改め、キリストを

8 一八三一年にヴァージニア州サウサンプトン郡で起こった、ナット・ターナー（一八〇〇—一八三二）を首謀者とする奴隷反乱。五十名以上の白人が殺害され、ターナーは捕えられて処刑された。この反乱の結果として、白人から黒人への報復的暴力が南部各州で発生し、奴隷制廃止論に対する警戒と反発は強まった。

9 一八三一年にヨーロッパ各国で流行したコレラは、翌年にはアイルランド移民とともに北アメリカに持ち込まれ、東海岸や中西部の都市で流行した。一八三二年の夏には、フィラデルフィア近郊で鉄道敷設作業に従事していた五十七名のアイルランド移民労働者がコレラで死亡した。

10 ジェイムズ・M・ハンソン（一七八二—一八六〇）は、当時この地域で人気があったメソジスト監督教会の牧師。

つうじて神と和解しなくてはならないと彼は考えていた。わたしは、自分がなにを求められているのかについて、とてもはつきりとした考えをもっていたとは言えないが、ひとつだけはとてもよくわかっていた——自分が惨めであり、惨めでなくなる手段がないということ。さらに、光を求めて祈ることはできるということも知っていた。チャールズ・ジョンソンという名の善良な黒人に相談すると、彼は神聖な愛情に満ちた口調で、わたしに祈るように言い、なんのために祈るのかを教えてください¹¹。わたしは何週間にもわたって、疑念と恐怖の暗闇と悲惨のなかをさまよい歩くと、哀れな心破れた悔改者であった。神に「思い煩いはなにもかもお任せ」し、謹厳に主を求める人々の贖い主、友人、救済者としてイエス・キリストに信仰を寄せることで到来するあの気持ちの変化を、わたしはついに見出したのだ¹²。

これ以降、わたしは世界を新たな光のもとで眺めるようになった。新たな世界で、新たな物々に囲まれて生きていて、新たな希望と欲求によって生命を与えられているようであった。わたしは奴隸制をこれまで以上に憎んだが、全人類——奴隸所有者たちも例外でない——を愛した。いまやわたしの大きな関心は、世界を回心させることにあった。知識への欲求が増大し、特に聖書の中身を徹底的に知りたいと願った。ボルチモアの汚れた路傍の排水溝から、この神聖な本の散らばった頁を拾い集め、洗って乾かす

11 当時のフェルズ・ポイントには、チャールズ・ジョンソンという名の自由黒人が複数名いたことはわかっているが、どのチャールズ・ジョンソンなのかは不明。
12 ペトロの第一の手紙^{2:10}に基づく。

ことで、余暇にそこから智慧の言葉を得られるようにした。このように謹直に知識を求めるときに、ローソンという名の善良な老黒人を知った¹³。彼以上に信仰心の厚い人物をわたしは知らなかった。彼は、ボルチモアのフェルズ・ポイントにあるロープ製造場の所有者であるジェイムズ・ラムジー氏に雇われて、荷車を引いていた¹⁴。この人は一日に三回祈りを捧げるだけでなく、仕事中に——荷車を引いて——道を歩きながら、どこでも祈っていた。彼の一生は祈りの一生であり、彼の話は（友人たちに話しかけるとときには）現世よりもよい世界についてであった。ローソンおじは主人ヒューの家のそばに住んでいて、わたしはこの老人に深い愛着を抱いていたので、しばしば彼と一緒に祈り集会に行き、日曜日には余暇の大部分を一緒に過ごした。この老人は少し文字を読むことができたが、わたしの方が読みはよくできたので、難しい単語を説明してあげて彼をおおいに助けた。わたしは彼に「字面の意味」を教えることができたのに対し、彼はわたしに「真の意味」を教えることができた。そして、わたしたちは神を歌い祈り賛美して、心洗われる素晴らしい時間を共に過ごした。ローソンおじとの会合は長いあいだ続いたが、主人ヒューや女主人に知られることはなかった。だが、わたしが信心深くなつたことはふたりにもわかっていて、わたしの実直な敬虔さを尊重してくれているようであった。女主人はまだ熱心な信徒で、分会

13 チャールズ・ローソンは、フェルズ・ポイントに住んでいた自由黒人。ダグラスより四十歳以上年長で、ボルチモアのベテル・アフリカン・メソジスト教会の信徒であった。
14 ジェイムズ・ラムジーのロープ製造場は、フェルズ・ポイントを南北に走るポンド通りがテムズ通りに突き当たる地点にあった。

に属していた。彼女の指導者は、首席長老のビヴァリー・ウォー牧師——現在のメソジスト監督教会の監督のひとり——にほかならなかった¹⁵。ウォー氏は当時、ウイルク通り教会に配属されていた¹⁶。わたしが念を入れてこうした事実を述べるのは、わたしの精神を形成し方向づけるのにまさに関わっていた影響について、読者が思い描くことができるようにするためである。

女主人には彼女なりの生活に関わる心配や不安があり、特に参加していた宗教的な集会から離脱したことからもわかるように、彼女の熱意は前に述べたように薄れてしまい、指導者から訪問を受ける必要がでてきた。そのため、ウォー氏がわたしたちの家にきてくれたので、彼が助言を与え、祈りを捧げるのを聞く機会がわたしにもあった。しかしわたしにとって、宗教面での最大の指導者はローソンおじであった。彼はわたしの精神の父であり、わたしは彼のことを非常に愛していて、機会があれば彼の家に入り浸っていた。

わたしにこの楽しみが許されていたのは長くはなかった。主人ヒューは、わたしがローソン師のところに行くことを嫌うようになり、また行ったら鞭打つぞと脅したのだ。それでわたしは、邪悪な者に迫害されているような気分になり、どんなに脅されたってローソン師のところに行つてやろう、という気だった。この善良

15 ビヴァリー・ウォー（一七八九―一八五八）は、当時、ヒュー・オールド一家が通っていたウイルク通り教会を含む、東ボルチモア地域本部の首席長老であった。一八三六年に監督に選出され、一八五二年にはメソジスト監督教会の首席監督となった。

16 ウイルク（ウイルクスとも表記される）通り教会は、ベセル通り（前出のボンド通りのすぐ東を並行して走る通り）と東大通りの交差点にあった。

な老人はわたしに、「神はお前がやるべき大きな仕事をお与えくださる」ということ、わたしはそれに備えていないといけないということ、そして、福音を伝道するのがわたしの使命だというお示しがあったことを以前に話してくれていた。彼の言葉はわたしの心に深い印象を残し、いったいどうやって実行したらよいかはわからなかったけれども、そのような仕事がわたしを待っていると本当に感じた。「神様のご都合のよいときにそれは訪れるだろう」と彼は言い、わたしは聖書を読み研究し続けなくてはならないと言った。ローソンおじの助言と忠告は、わたしの性格と運命に影響を与えないでいることはなかった。彼はわたしの思考をある道筋へと向かわせ、以来、思考がそこから外れたことはなかった。彼がわたしに、お前は世間で役に立つ人間になるんだと断言するので、すでに激しかったわたしの知識欲は燃えさかるほど掻き立てられた。わたしが「どうすればそんなことってありえるんだい——僕になにができるんだい？」と訊くと、彼は「神を信じるんだ」と簡単に答えるだけだった。わたしが「僕は奴隷で、一生、奴隷なんだ」と言うと、「神はお前を自由にできるんだよ。神はなんでもできる¹⁷。ただ神を信じなさい」と彼は言った。「求めよ、さらば与えられん。」¹⁸「自由が欲しいなら、神を信じて求めるんだ。そうすれば神が与えてくたさる。」

このように希望に感化されて力づけられ励まされ、わたしは自分の一生は自分自身で理解できるよりも高いところにある叡智によつて導かれていると信じながら、軽快な心で働き祈った。恵み

17 マタイによる福音書 19:26
18 同前

の座で求められるほかのすべての恩恵とともに、神がその偉大な慈悲から、そしてご都合のよいときに、わたしを隷属から解放してくれることを、わたしはつねに祈っていた。

ある日ウォーターズ氏の波止場に行くと、ふたりのアイルランド人が大きな平底船から底荷の石を降ろしていたので、頼まれもせずに船に乗りこんで、彼らの手伝いをした¹⁹。仕事が終わると、彼らのうちのひとりがわたしの傍にやってきて、いくつもの質問をしてきたのだが、そのうちのひとつが、わたしは奴隷なのかというものであった。「僕は奴隷で、一生奴隷だ」とわたしは彼に言った。この善良なアイルランド人は肩をすくめて、この返答に深く心を打たれたようであった。「お前みたいなよくできたやつが一生奴隷だなんて気の毒だ」と彼は言った。ふたりともこれについておおいに意見を述べ、わたしへの深い同情と奴隷制に対する非常に断固とした嫌悪を示した。彼らは、わたしが逃亡して北部に行くべきだとさえ言った。北部ならきつと支援者も見つかり、ほかの人とかわらず自由になれるぞと言うのだった。しかし、彼らがわたしを陥れようとしているのかもしれないという恐れがあったので、わたしは彼らの言うことに関心がないそぶりを買った。白人は奴隷に逃亡をそのかすことが知られていて、その上で——報酬を得るために——奴隷をさらって主人のもとに戻すということがあった。そしてわたしは、このふたりは正直でわたしに悪意などもっていないという考えにおおむね傾いていた

19 ジョージ・P・ウォーターズは、フェルズ・ポイントのフェルズ通り（先述のテムズ通りから南東に海岸沿いに延びる通り）の南端に波止場を所有しており、付近で船具店と食料品店を経営していた。

が、そうではないかもしれないとも恐れたのだ。だがわたしは、彼らの言葉と助言を記憶に留め、心から切望している自由を得るためのひとつのありうる方法として、北部への逃亡に期待をかけた。この当時のわたしの心に最も重くのしかかっていたのは、自分が奴隷の境遇にあるということではなかった。一生、奴隷であるということが最も悲しむべき考えだったのだ。すぐに逃亡を考えるにはわたしは若すぎたし、自分自身の外出許可証を書く機会もあるかもしれないので、逃亡前に文字の書き方を学んでおきたいと思っていた。いまやわたしは自由の希望だけでなく、この計り知れないほど貴重な恩恵をもしかするといつか手に入れるための手段の予兆を得たのだ。同時に、自分の教育上の達成事項のうち、文字を書く技術を加えることを決意した。

次のようなやり方で、わたしは書き方を学びはじめた。造船所——主人ヒューが働いていたターガンとベイリーの——にはよく出入りしていたのだが、大工たちが木材を切断して使えるようにしたあとに、船のなかでその木材が使われる部分の名称の頭文字を木材の上を書いておいた。たとえば、木材が右舷スターボードに使用される際には、大文字の「S」が記されていた。左舷ラーポートのため木材には「L」、左舷船首側は「L・F」、左舷船尾側は「L・A」、右舷船尾側は「S・A」、右舷船首側は「S・F」と記されていた。わたしはすぐにこれらの文字と、それらがどんなことを表すべく木材の上にかかれておいたのかを学んだ。

このとき、わたしの仕事は、蒸気室の火を絶やさないようにすること、それに、大工たちが食事に行っているあいだ、造船所を見張ることであった。この合間の時間は、この四文字を書き写す

のうってつけの機会を提供してくれた。ほどなくしてこれらの文字を容易に書けるようになったので驚いたが、「四文字書けるなら、もっと書ける」という考えがすぐに思い浮かんだ。ところがこちらの文字も容易に書けるようになったので、ホテル教会周辺、あるいは遊び場周辺のどこでも、少年たちに会えば書き方の技術の勝負に挑み、幸運にも習得できた文字を書いてみせては、「やれるもんならもっと書いてみな」と言ってみせたのだった。わたしは遊び仲間を先生、柵と舗道を練習帳、チョークをペンとインクとして、書き方の技術を学んだ。だが、のちには、書字を改善するためにさまざまな方法を用いた。最も成功したのは、ウェブスターの綴り字学習本の斜字体の文字を、本を見なくてもすべて書けるようになるまで書き写すことだった。このころには、小さな「主人トミー」は大きな少年に育っており、書き終えたたくさんの練習帳を家に持ち帰ってきていた。それらは近所の人々に見せられて相応の賞賛を引き出したのち、注意深くしまひこまれていた。造船所と家とのあいだで時間を過ごしていたわたしは、前者だけでなく後者でもひとりきりで番をすることが頻繁にあった。女主人がわたしに家を任せて出かけるとき、わたしにとって願ってもない時間となった。主人トミーの練習帳とペンとインクを持ち出してきては、行間の十分な余白に、できるかぎり彼の文字に似せて文字列を書いたのだ。これは退屈な作業であり、長男の非常に大切な練習帳を台無しにしたという理由で鞭打たれる危険もあった。こうした機会に加えて、台所の屋根裏——家族のだれもめつたに足を踏み入れない部屋——でわたしは寝ていたのだが、そこには小麦粉の樽ひとつと一脚の椅子があった。

この樽の上で、聖書やメソジスト派の聖歌集など手に入った本を書き写しながら、夜遅くまで、家族全員が床に入って寝静まったときに、書きものをしていた（あるいは書きものを試みていた）。この試みにあたっては、善良なローソン師からの新たな助言と神聖な励ましが支えとなった。彼とは一緒に会い、祈り、聖書を読むことを続けていた。主人ヒューはわたしにローソン師のもとへ行っていることを気づいていたが、このように罪もないことに余暇の時間を使っているためにわたしを鞭打つという脅しは、一度も実行されなかったことを彼の名誉のために言わなくてはならない。